

知育の重要性を再認識せよ

「思考重視」の名のもとに知識を軽視した結果、知識も思考力もない生徒が育ってしまったのではないか

学力テストをめぐる

日教組は、学力テストに怨念でも抱いているかのように否定的態度を示し続けている。また、現場教師が学力テスト結果を気にすることも、ひと通りではない。

小平市の小学校に勤務していた頃である。学力テストに関して、平素尊敬している教頭から指示があった。テスト問題は、一斉試験日以前に教師の手に届いている。小細工をやるうと思えばできない話ではない。自分の学級のテスト結果を「向上」させるために、教師が事前工作をする危険がある。教育的良心の上に立って、そのようなことが起こらないよう、全校に目を光らせていてもらいたいとの指示である。

その際彼は私に言った。「小川さん、テスト結果の水増しを図るような工作だけに注意しては駄目なんだぞ。逆に自分のクラスだけが飛び抜けて良い結果になることも先生方は気にしている。特に女の先生には、他のクラスと大きな差が出ないように配慮する傾向がある。その点も気をつけなければならないんだぞ」私は、流石に大物教頭ともなると目の付け所が違いと驚いたが、それほど教師は「学力テスト結果」を気にするものなのである。

悉皆（しっかい）テストを抽出テストに切り替えようと主張する日教組の本音は、学力テストの全面廃止であるのかも知れない。またテスト結果を公表することについては、日教組のみか、地方教育委員会にすら、これを忌避する傾向が強い。当時者の事なかれ主義の表れであるが、同時にその背後に「一回り限りのペーパーテストで何が分かる」という「教育理念」が隠されている。それほど当てにならないものなら、結果を気にする必要もないように思われるのだが、なかなかどうして、そう簡単には参らない。公表を恐れる自治体、教育委員会は決して少なくないのである。

実は作りようによっては、この「たった一枚」のテストは、（実際には相当のページ数に及ぶものであるが）相当深い内容をテストすることができる。悉皆にせよ抽出にせよ、現在行われている学力テストの内容については、成る程と頷けるほどの質的水準が保たれている。作成者の識見の高さに敬意を表せざるを得ない。

「たった一枚のテスト」を軽視する背後には、「知識ではなく思考を重視しなければならない」とする戦後教育の建前が潜んでいる。この60年、「まる暗記」がどれほど厳しく否定され続けて来たことであろうか。

「思考重視」「知識軽視」に欺かれるな

「詰め込み勉強」と言えば、悪い学習の代表選手のように言われ続けている。戦前、戦中にこのような言葉は聞かなかった。高校生の頃の私は、この「詰め込み勉強」という発想

に強く反発を覚えた。「弁当箱に飯を詰め込むことはできる。しかし人間の頭脳に知識を詰め込むことができるものであろうか。どうやって詰め込むのだろう」と、不思議に思っていた。

中、高校生は、この「思考重視」「知識軽視」という傾向を天から相手にしていない。

知識がなければ良い成績を取る事などできるものでないというリアリズムを、実践体験から彼らは、しっかりとつかみ取っていたのである。

「欺かれない集団」がもうひとつ存在した。学習塾である。厳しい競争原理にさらされている彼らは、妙な観念論に欺かれることがなかった。学習塾は、せつせと知識を生徒に吸収させることに専念した。今日の公立学校は、何故生徒が、ひと月数万円の受講料を払って学習塾に通い続けるのかを、自己反省的視点に立って考え直すべきである。

私が勤務する狭山ヶ丘高校の、あるクラスで、中国に隣接している国の名前を列挙させてみたことがあった。ほとんどの生徒は適切に答えることができなかった。せいぜい、北朝鮮、ベトナム、ロシア、くらいを彼らは列挙するだけであった。私は彼らに、世界地理に関する知識が完全に欠落していることに驚いた。

中国には、北朝鮮、ロシア、モンゴル、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インド、ネパール、ブータン、ミャンマー、ラオス、ベトナム、が国境を接している。この事実を知って生徒は、中国が、いかに恐るべき国家であるかを実感することができたのである。そこから、この国の抱える様々な問題、日中の今後の関わりのあるあり方について、彼らなりの様々な見解が開陳された。まさに「知識」が「思考」に結実する様を見せられたように思い、私は考え込んでしまったのである。知識がなければ思考など生まれるものではない。

北海道時代、私がまだ「新卒」だった頃である。北教祖の「教研集会」の社会科部門で「戦争をどう教えるか」というテーマの研究会があった。論議に参加していて私は、教師たちに、戦争の史実に関する知識が絶望的に欠落していることに驚いた。中には日清、日露の戦いが、どちらが先かすら弁えていない教師すらいた。日清戦争の歴史的背景、日露はどうして戦わねばならなかったか、そのあたりの知識がない教師が、「戦争をどう教えるか」を語り合っていたのである。

「思考」を軽視すべきだなどと言っているのではない。私が言いたいのは、教育実践の場において、知識と思考の間に「万里の長城を築く」ような姿勢は間違いだと言うことである。

「辛苦の思索」は「知識の習熟」が前提

私は月水金の朝3回、200人ほどの生徒を集めて、長文読解の英語授業を行っている。複雑に絡む長文を読み取って行くには、それこそ「脳みそがくしゃくしゃになるくらい」「脳みそから脂が滲み出てくるくらい」考え抜かなくてはならない。「辛苦の思索」「辛苦の思考」が厳しく求められるのである。しかし、少なくとも高校2年までのリーダーを丸暗記するくらい「知識の習熟」に専念した経験を前提にしない限り、どれほど「思考」を重ねたところで、難解な長文を読解することはできない。「馬鹿の考え、休むに似たり」ということであ

ろうか。まさに知識と思考は、切り離しがたく結びついているのである。

私は、昭和20年4月に旧制中学校に入学した。その年の8月が敗戦の年である。校長は斉藤という大物教育者であった。彼が折あるごとに、「そんな暇があったら、幾何の証明問題をひとつでも多く、英語の単語をひとつでも多く暗記しなさい」と言い続けていたことを、今懐かしく思い出す。彼は暗記と言うことを、今の学校教育のように忌避したり、おぼろげと主張したりすることがなかった。自信に溢れて知識吸収の重要性を強調した。

私自身の経験でも、幾何の証明問題の解き方を数多く覚えて初めて、新しい問題に直面した時に、さっと補助線を引けるようになることを実感していた。

私は35歳の時に明治大学法学部に学士入学した。仲間に司法試験を受けるグループがいたが、彼らも司法試験突破の秘訣は、基本書の読破と学説判例の暗記だと語っていた。

その仲間から尊敬されている「若梅さん」という先輩の司法修習生がいた。彼は「司法試験は暗記のテストではなく思考力のテストだ」と常々語っていた。しかし、仲間の誰彼が彼に質問すると、「それは我妻先生の民法講義の324ページに書かれている。確か7行目だったと思う」などと、正確な記憶を披露した。民法だけでなく全科目について同じようであったそうである。

そこまで行けば、当然「思考力」も育ってこよう。このあたりになると「知識」と「思考力」は、切り離しがたく結びついているのではないかと考えざるを得ないのである。

これまで知識と思考は、二律背反として受け止められがちであった。知識の定着を否定する方向で「思考の重要性」が一方的に強調された。その結果、知識も思考力もない生徒たちが育ってしまったのではないかと思うのである。ここに戦後教育の致命的な欠陥が存在している。

これは学校教育のあらゆる場面について言える。国語の授業でも、過剰に「問答式 授業」の大切さが強調される。社会科についてもそうである。「子供どうしの話し合い」の大切さが過剰に強調される反面、教師の「説話」は否定的に受け止められがちである。しかしこれは、戦後教育のみに見られる傾向ではない。そのオリジンは大正時代にまで遡ることができる。今回は、この点について具体的に触れることにしたい。

祖国と青年 9月号「教育再生への提言」掲載（平成22年9月16日）